
王宮公認会計士

水神夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王宮公認会計士

【Nコード】

N2115Y

【作者名】

水神夏樹

【あらすじ】

唐突に出てきたそれは言った「ぱんぱかぱーん おめでとう！貴女が『異世界トリップ』する事に選ばれましたあゝ」…ふざけてないで仕事に行かせて下さい。迷惑です。
突然変なのに異世界とやらに送られた早苗の、剣も魔法も使わないし魔王もいない日々。

序章

- 小さい頃、思い描いた夢があった。

その夢を追いかけてここまで来た。

ここまで来るのは早かったのか、周りからは優秀だと言われた。妬まれました。

でも、私はただ必死だった。他の事は必要最小限にしか顧みなかった。

たぶん、それだけが私の目標だったから。それしか無かったから。

羨ましかったのはきつと、私 -

- リイン...

何も無いその空間に微かな音が鳴った。

聴き取りがたいほど微かに響いた鈴のような音を、何も無いはずのその空間で男は確かに聴き取った。

それは、呼ぶ音。

それは、始まりの音。

それは、運命を変える音

狭間の世界

それ以外何も無い空間で、全身を黒い外套に身を包んだその（多分）男は満面の笑みを浮かべていそうな声で言い放った。

「ぱんぱかぱん おつめでとうございま〜す！貴女が『異世界トリップ』する事に選ばれましたあ！」

「…」

「どうしました〜？あ、僕はフィルって言います〜。怪しい者じゃありません」

「怪しいわ！どっからどう見ても怪しいわ！大体異世界トリップって何ふざけた事を…」
言いかけて気付く。

- ココは何処だ

目の前の男（仮）以外何も無い。本当に何も無い。信じたくはないが、自分が居た場所とは明らかに違う。帰る術も目の前の胡散臭さ全開の（多分）男が握っているんだろう。

「あ〜…もしかして疑ってますね〜？でも、選ばれちゃったんですよ〜異世界トリップ」

「無理です。選び直してください。早く還して下さい。仕事行くんです」

「ん〜それは無理？」

目の前の男（仮）が小首をかしげて言う。

（…）が正直可愛くない。フードで口元まで隠れているせいか寧ろ怖い。ついでに間延びしたしゃべり方も何となく嫌だ）

「そんなのは可愛い女子高生にでもお願いして下さい。社会人は真面目に仕事しなきゃならないんです」

「でも選ばれちゃったんで〜」

「迷惑です。大体何の基準で選んでるんですか。他にいくらでも居るでしょう。トリップしたい人。」

溜息をつきながら答える。男（仮）はその答えで、少し考える様なポーズをとりながら一歩近づいた。

「そうですね…ぶっちゃけ異世界トリップしたいって思ってる人ほど可能性は低いんですよ…。ざっくり説明しますとですね、一口に異世界トリップと言いましても何パターンかありますからね、二つの世界で事故なんかが同時に起こりまして、その衝撃でたまたま時空に歪が出来まして、そこに引つ張られちゃうタイプと、何らかの力を使って、他の世界から人なり動物なり何なりを召喚するパターンですね。この二つは、言葉が通じないとかの弊害が起こったりしやすいですよ。まあたまに空間超える時に文字は無理でも言葉は理解できるように順応しちゃう適応力抜群の方もいらっしやるんですけどね。」

（長い。説明も長いが間延びした話し方のせいで余計に長い）

「で？私は後者でいいの？」

「あ、貴女はもう一つの方です。」

「まだあるんだ…。」

正直説明聞くのが面倒になってきた。聞くまでココから出してくれなさそうだけれど。

そう胸の内を吐くが、そんな内心を知ってか知らずかマイペースに男（仮）は続ける。

「はい。貴女は世界に呼ばれた方ですから。」

「世界に…呼ばれた？」

「そうですね。別の世界の、そうですね、神とでも言いましようか、取り敢えずそんな感じの存在に引つ張ってこられた方です。世界に呼ばれた方はあ、ココみたいな『世界の狭間』を通るんですよ。あと、神様特典として、言葉の理解やらご希望の能力なんかを、お付けいたします。」

「神様って…。」

「まあ、貴女連れてきたのは僕なんですけどね。」

（あんたかよ。何となくそんな気はしてたけどやっぱりか！）

口にも顔にも出さないが（社会人スキル）内心は突っ込みと悪態で一杯になってきている。

でも呼んだと言われたので取り敢えず聞いてみる。

「何の御用ですか？」

「それはいえませ〜ん」

……………殴りたい。

そんな気持ちを込めまくって男（仮）を睨みつける。

「お断りします。」

「ええ〜！？お〜ね〜が〜い〜し〜ま〜す〜よお〜」

「ふざけないでください。理由も知らずにそんなこと承諾出来るわけがないでしょう！？」

「仕方ありませんね〜。じゃあ無理矢理行っていただきますしよ〜」

「

「はあ！？ふざけないで！無理！嫌！帰らせて！！」

「あはははは〜。では行ってらっしゃいませ〜」

男（仮）がそう言った途端に、何も無い空間に光が広がる。自分の感覚が心許ないものになっていく。

「やだ！ね、還して！」

「だあ〜いじょうぶですよ〜。今あちらでは〜貴女が必要なんですよ〜。だから、頑張つて下さいね。真木早苗 まきさなえ さん」

（間延びしないでしゃべれるなら最初からそうしてよっ）

そんな事を思いながら、早苗の意識は途切れた。

出会い

世界が白く輝いて目の前で弾けた。滅茶苦茶眩しかったただけとも言
うが。

あの何も無い空間から次に目にしたのがそれだった。

(…って！！普通異世界トリップって目が慣れるまで時間かかるもん
なの！？目を開けたら別の世界でしたじゃないの！？)

「…お前、誰だ？どうやって此処へ入った？」

突然頭上から低音が響いた。

「すみません。解りません。とりあえず目が慣れないので見えてま
せん。此処が何処かも解りません」

「…」

此処が何処かも相手が誰かも解らないので、必要最低限に状況だけ
を伝えると、はあ…と溜息が落ちてきた。

(うん。溜息つきたくなりますよねー)

「デイスファルト」

「はい？」

なんとかぼんやりとは見えるようになってきた目を、声のする方に
向ける。

「俺はデイスファルト・エルクロード。レグルド大陸にあるルフア
国の宰相だ。この中に聞き覚えのあるものはあるのか？」

「ご親切にありがとうございます。でも聞き覚えのある名前は全く
ありません」

そう言いながら早苗は頭を下げる。

「…随分冷静だな」

(いえいえ、貴方も大概冷静だと思いますよ…っは！語尾があの
変態外套男みたいになってる！！)

「人間混乱しきると案外冷静に見えるようです」

「そうか。目は？」

そう言われて何度か瞼を瞬かせてみる。今度はきちんと周りの景色も見えるようになっていた。

「あ。大丈夫みたいです。ありがとございます」
言いながら相手に目を向ける。

（うわお！超好み！）

「そうか。ならば其方の事を聞かせてもらえるか？」

そう言いながら茶色の涼やかな瞳を向けられる。

ダークブラウンの長い髪を無造作に一纏めにした長身で細身。顔の造形もなかなか整っている。

宰相と言っていたが、部屋の感じからして恐らく此処は彼の私室だろう。

早苗は少し緊張しながら立ち上がり頭を下げた。そして自分の社会経験から得た物を総動員して答える。

「不慮の事態とは言え、突然現れて申し訳ありません。私は真木早苗と申します。此処に来る前、何もないとしか表現しようのない空間で黒い外套の人物に異世界に送ると言われ、拒否したんですが強制的に此処へ送られてしまったようです」

「何も無い空間で…黒い外套…」
思案するように男は視線を上げる。

「はい。信じ難い事とは思いますが、私が元に居た場所とは全く違う場所に居ます」

「そうか。信じよう」

「…はい!？」

「どうした？信じると言ったのだが？」

「いえ、自分で言うのも何ですが、信じないでしょう。普通」

「嘘なのか？」

「本当です！でも…いきなりこんな事言われても信じられないんじゃないんじや…」

余りにもあっさり信じると言われ、早苗の方が戸惑ってしまう。

「この世界に魔法は存在しない。あの様に唐突に光って人間が現れ

るなど私が知る限り、不可能だ」

「そう…ですか」

説明されても何となく腑に落ちない。それがうっかり顔に出ていたのだろう。男が続けた。

「前例があるからな」

「…前例？」

「ああ。今から五年程前にな」

「ほんとうですか!？」

信じられない言葉に今までの低姿勢も吹き飛び男に詰め寄る。

「本当だ。近いうちに会えるように…」

言いかけた時、物凄い勢いでドアを開け放ち一人の美少女が駆け込んできた。

「デイスファルト!!」

(扉をばぁん! って音立てて開ける人初めて見たよ…見た目は妖精さんなのに…)

派手ではないが美しく上質なドレスを着た女性が、正に全力疾走した後の様な出で立ちで肩で息をしながらそこに立っていた。

「王妃様!？」

「ええ!？王妃様!？」

男・デイスファルトが慌てて口から出した単語に早苗まで驚く。当の王妃は膝に手をつき必死で息を整えていたが。

それを見て彼は先ほどより遙かに重い溜息をつき、つぶやいた。

「最近は大入しかつたのだが…」

「はい？」

「いや、気にするな。こちらは此処ルファ国王妃、マリー・イートウア・ルファ様だ」

そう言つて彼は王妃様に向き直った。

「王妃様、彼女は…」

「異世界から来たのよね？」

「は？」

「え？」

王妃様がデイスファルトの言葉を遮って放ったセリフに、二人して固まる。

(いやいやいや！何で！？)

「今ね、うっかりお昼寝してたら夢にフィルが出てきてね。『強力なく助っ人をく送りましたので、今頃は宰相さんのお部屋ですかね』とか言ってたから飛び起きて走ってきたの」

そうあっさり言っただけで王妃様はにっこりと微笑んで下さいました。

「え！？フィルって…変態黒ずくめ！？」

うっかりお昼寝だの走ってきたのはともかく、しつかり声真似をしてくれたので間違いは無いだろう。

(しかも妙に似てるし)

「そうそう」

「あの、どうして…」

自分でも今までにないくらい混乱していたのだろう。何も取繕えず口から言葉が出る。

「ああ！自己紹介がまだだったわね。私は一応この国の王妃、マリ―だけど本名は伊藤真理。別の世界から此処に来ました。半強制的に」

笑顔で爆弾発言をしてくれた王妃様だったが、一つ本名に引っかかった。

「日本人…？」

「ええ！もしかして貴女も！？」

(王妃様の目が輝いたようにみえた)

「あ！はい。申し遅れました。私、真木早苗と申します」
そう言いながらデイスファルトにしたように頭を下げる。

「早苗さんね！私の事は真理って呼んで下さいね！」

「で、でも」

さっきより遙かに嬉しそうな王妃・真理の様子に、困惑しながらデイスファルトに視線を投げる。

すると彼は、また軽く溜息をつきながら頷いて見せた。

「じゃあ、真理さんで」

「ええ。よろしくね。デイスファルト！」

「はい」

「早苗さんは一度私が引き取ります。貴方は今回の事をレジアスに報告しておいて」

「畏まりました」

そう言っただイスファルトは部屋を出て行くこととする。

「あー！」

「どうした？」

「ありがとございました。デイスファルト、さん」

「ああ。気にするな。ではまた後ほど」

そう言っただイスファルトは部屋を出て行った。

「さあ、早苗さんここでは何だから私の部屋へ移りましょうっ？」

「いいんですか？」

「ええ。ここへ来る前に侍女には伝えてあるから」

（ここにこしながら言ってくれてるけど…何だかこのままでいいの！？この展開って何かおかしくない！？）

心で叫びながら早苗は嬉しそうな真理に引きずられるように王妃の間へと連れられて行った。

王妃様とのお茶会

そうして訳がわからないまま連れてこられたのは、デイスファルトの私室から結構離れた所にある王妃・真理の私室だった。

（王妃様がこれだけの距離走って来て誰も何も言わなかったの…？）案内された部屋に着き、早苗がまず最初に思ったのがそれだった。

「さ、どうぞ」

室内には真理が言っていた様にお茶の準備が整い、侍女らしき女性と見た感じ女官長の様な女性が傍に控えていた。

室内に入り、控えていた二人に頭を下げ、勧められるままに椅子に腰かける。

真理が向かいに腰を下ろし、目の前に紅茶とクッキーと思われる焼き菓子が置かれる。

「ゆっくりでいいの。聞きたい事、思っている事を話せるだけ話して」

「え、と」

先ほどデイスファルトの前と今の真理では雰囲気が違う。早苗が戸惑いを隠せずにいると、真理はそれに気付いたようにふわりと微笑みを浮かべた。

「ねえ、早苗さん。すごく強引で人の話を聞かない人を相手にする時って、どうしたらいいと思う？」

「強引で、人の話を聞かない人…ですか？」

「そう」

「そう…ですね。聞いてくれるまで根気よく話すとかですか？」

「そうね。解り合いたいならそうするのが一番かも知れないわね。

でも、とにかくこっちの意見を通したい時はね、相手よりも強引に笑顔で押し切るのが一番手っ取り早いよ」

「はあ…」

正直、話の意図がよくわからない。だが、何だか聞いておかなけれ

ばいけないような気がするので、余計な質問は挟まずに聞いておく。
「早苗さん。この国にはね、強引だわ人の話は聞かないは自分は絶対
に正しいと思ひ込んでるわ思い込みで決めつけるわっ…とにかく
そんな人がごろごろ居たのよ」

真理は余程嫌な思いをしたのだろうか、肩で息をしながら可愛らし
いとしか表現しようのない顔を忌々しげに歪めた。笑顔のままです。

(どうやったらそんな表情を作れるんですか!?)

「居た…って事は今は居ないんですか?」

微妙に怯えつつ、話を進めるべく質問を挟む。真理も表情を元のふ
んわりした笑顔に戻した。

「いいえ。随分減ったんだけどまだ居るのよ。それで私も割とあんな
感じになっちゃったのよね。ディスプレイは違うんだけど、つ
いね」

そう言いながら真理は苦笑するように笑った。

(何に戸惑ったか、気付いてくれたんだ…)

戸惑っている事には気付いたとは思ったが、何に戸惑ったのかまで
正確に把握していた。

「真理さん…」

先ほどもそうだったが、早苗が呼びかけると真理の瞳が嬉しそうに
輝く。

「ありがとう」

「何が、ですか?」

「名前で呼んでくれて」

そうやって真理は少しさびしそうに笑う。

「名前ですか」

「そう。名前。この世界に来てから本当の意味で“真理”って呼ば
れた事は無いから」

「マリーさんって名乗ってるからですか?」

「それもあるけど…この世界の、少なくともこの国と交易がある国
に漢字が使われる国は無いのよ」

「漢字…」

「ええ。私も曲がりなりにも日本人だしね。私ね、此処に来る前はイギリスに居たの。それで、イギリスも英語圏だし最初はそんなに気にしてた訳じゃなかったのよ。でも、イギリスにも日本語を勉強してる人が居たし、日本人もいた。漢字やひらがなが全く通じないなんて事なかった。同じ世界なんだもの、当然よね。でも、この国には漢字がないから。“真理”って呼んでくれる人はいなかったの。感傷でしか、ないのかもしれないけど…ね」

「…」

何も言えなかった。確かに真理の言うように感傷でしかないのかも知れない。でも、デイスファルトは彼女がこの世界に来たのが五年前だと言っていた。…五年。還る術があるのかどうかは解らないが、彼女は王妃だ。その立場は軽くないのだろう。例え還る術があったとしても、そう簡単には還る事は選べないだろう。その間、それぞれ色々な事があつたのだろう。自分と同じ立場の人間が表れたと聞いて、立場も外聞も関係なく結構な距離を走ってくるほどに。同郷の人間に名前を呼ばれただけで、傍目に解るほど瞳を輝かせるほどに。

「早苗さん!？」

真理の驚いた声に我に返ると、頬に涙が伝っていた。

「あ…」

誰よりも自分がその事に驚いた。突然知らない場所に放り出された事に動揺しきつていて、まともに感情が機能していなかったのかも知れない。それが真理の話聞いていて箍が外れた。

(もし、真理さんが此処にいなければ、私はどうなっていただろう) そう思うと真理の感傷も他人事ではない。

そんな事を考えていると、ずっと目の前にハンカチが差し出された。

「ありがとうございます」

「いえ、ぶしつけな質問でございますが、王妃様・マリ様と同じ国の方なのでしょうか？」

ハンカチを差し出してくれた、女官長の様な女性は優しくな声音で尋ねてくれた。

「はい。来る前は真理さんは別の国に居たそうですが…」

「そうでございますか」

厳しそうな外見をしていたが、女性はそう言って優しく微笑んでくれた。

「申し遅れました。私はこの城の女官長をしております、マーロウ・バツティと申します。あちらの侍女は王妃様の専属を仰せつかっておりますエルミアでございます」

そう言ってマーロウとエルミアはお辞儀をした。

「こちらこそ、名乗りもせず失礼致しました。私は真木早苗と申します」

思わず立ち上がって深く頭を下げる。

「ふふっ先に紹介しておけばよかったわね。早苗さん、彼女達は私がおここに来てからずっと支えてくれていたのよ」

真理が笑顔で告げると、マーロウは申し訳なさそうな顔をする。

「とんでもございません。御話中、申し訳ございませんでした」

「いえ、ハンカチありがとうございました」

早苗はもう一度頭を下げる。

「マーロウ、気にしないで。さあ！早苗さん座って。お話の続きをしましょうっ？」

笑顔の真理に言われて椅子に座り直す。そっとマーロウとエルミアを見ると、二人とも笑顔だ。

その事が早苗の心を少し軽くした。知らず緊張していたのだろう。

「そういえば、早苗さんはいくつ？」

「今年25になります。真理さんは？」

「私は27よ」

(…!!!見えない!!!20歳くらいかと思ってた!!!)

「ふふっびっくりした？」

「はい」

「じゃあ、お仕事は？」

「小さな会計事務所で会計士補をしていました」

「会計士補？」

「はい。今年で3年目なので、来年には公認会計士の受験資格が出来たんです……」

言いながら少し悲しくなる。

「公認会計士……」

「はい！子供の頃からの夢だったんです！」

「じゃあ、目前まで来てたのにねえ」

「はい……」

そう肩を落とすと、真理も苦笑しながら告げた。

「私は大学の卒業まであと1年くらいの時だったわ」

「…嫌がらせですかね？」

「本当にね」

そうして二人で笑いあう。早苗の中の不安と混乱が解けていく。

（きつと、真理さんはそのために私をここへ連れてきてくれたんだ…）

それから二人でたくさん話を話した。他愛無い話も、大事な話も。その中で真理が言うには、世界に呼ばれた人間は、呼ばれた理由がある。少なくともそれをしないと還れないらしい。そしてそれは恐らく、私の仕事に関係あるだろう事も。

なのでしばらくはここで生活しなくてはいけない。ならばやるしかないだろう。還るために。

そうして早苗の異世界での生活は始まるのだった。

王妃様とのお茶会（後書き）

真理さんはルファ国に来てから相当色々ありました。そのせいか初登場から作者の想定外の動きばかりしてくれませう。

お開き直前の乱入者

随分長い時間、真理と話していた気がする。

デイスファルトの私室では、窓から入る陽の様子だと丁度お昼を過ぎたころの様だったが、今ではすっかり夕日が部屋に差し込んでいる。

「もう随分陽が落ちたわね。そうだ！早苗さんに部屋を用意してもらってるの！此処にいる間は慣れないだろうし専属の侍女にも付いてもらうことにしたから」

「侍女！？」

「ええ。はっきり言って慣れないだろうし、要らないって思うだろうけど、向こうとこっちじゃ結構違う事も多いから。何だかんだで助かる事も多いわよ？」

「そうなんですか…」

さすがに経験者が言うと言得力がある。

「まあ、慣れるまではね。それから部屋なんだけど…」

その時、部屋の外がざわつき扉が蹴破られた。

（…はあ！？蹴破られた！？）

固まってしまった早苗をと蹴破られた入口から入ってきた人物を見比べ、真理は困ったように柳眉を下げた。

「陛下！！」

恐らく蹴破った犯人であろう男と、その後ろから男を呼びながらデイスファルトが入ってきた。

（陛下って…）

先に入ってきた男・恐らくこの国の国王・を見やる。

（うっわ！無駄に美形！）

神々しい美とはこういうものだとでも言うような、金髪碧眼のお伽噺から抜け出てきたような、正に王子様という容貌の男が立っていた。

間違ってもドアを蹴破る様には見えない。

「レジラス。せめてドアは壊さないでっついても言ってるのに…」
真理はそう言いながら男の隣に立つ。

二人が並ぶ姿は、とても神秘的で似合っていた。

（でも蹴破った犯人なんだ。しかもいつもなんだ。あー、黙って並んでると夢の世界の王子様と妖精のお姫様！なのになあ… 童話の挿絵みたい、なのに）

「怪我は無かったか？」

いつの間にも移動したのか、すぐ隣に来ていたデイスファルトに尋ねられた。

「はい。それは大丈夫なんですが…」

「そうか」

「あの無駄にキラキラしてる人、この国の王さまですか？」

「…そうだ」

「…」

色々言いたい。そう思いデイスファルトの顔を無言で見る。

すると、デイスファルトは溜息をつきながら言った。

「言いたい事は解る気がする。が、いつもの事だ。気にするな」

「…苦労してそうですね…」

「いや、まあ、王妃様程ではない、な」

（否定はしないんですね）

デイスファルトの何となく歯切れの悪い返答に何と返そうか逡巡している、いつの間にか真理と国王も傍に来ていた。

「早苗さん、紹介しておくわね。一応私の夫でこの国の国王やっつる」

「レジラス・ローウィ・ルフアだ」

そう自分で名乗り、レジラスはそれこそ物語の王子の様な笑顔を浮かべた。

「…」

思わず。唾然とした。あまりにも似ていた。顔の造形ではなく、表

情の作り方が。

「早苗さん？」

呆然とレジアスを見上げる早苗を不思議に思ったのか、真理に呼びかけられてようやく我に返る。

「す、すみません。真木早苗と申します。既にお聞きとは思いますが、不慮の事態でこちらに来てしまい、暫くこちらで御厄介になることになりました。よろしくお願いします。」

そう言って今日何度目かになるお辞儀をする。

「…ああ。よろしく。そういえばサナエはマリと同郷だそうだな？」

「はい。真理さんはこちらに来る前は別の国に居たそうですが…」

「そうか。なら、時間が出来れば故郷の話聞かせてくれないか？」

私とマりに

「はい」

（奥さんの故郷を知りたいだけなのか、こつちを警戒しているか…まあ当然か）

そんな胸の内は一切出さずに頷く。

「…お前、使えそうだな」

唐突に口調が変わった。思わず顔を見ると、表情もすっかり変わっている。

「…はい？」

「聞こえなかつたか？」

「聞こえましたよ」

即答すると愉快そうに笑う。

そのやり取りを見ていたディスプレイはまた深い溜息をつき、真理は少し驚いたように目を見開いた。

「珍しいですね。陛下がご自分の本性をさらけ出すのは」

「そうだな。だが、サナエは感付いていたようだぞ？」

「そうなの！？」

一斉に早苗に視線が向けられる。真理なんてぐりんと効果音がつきそうな勢いで。

今まで一切口を挟まず、そつと成り行きを部屋の隅で見守っていたマールウとエルミアも、心底びっくりしたと言つように早苗を見ている。

(…読まれてたか)

「…」

何と喋っているのか、言葉に詰まる。相手は一国の王だ。余り迂闊なことも言えないだろう。

「気にしないでいいぞ。お前はマリの友人だろう?」

あっさり被っていた猫を脱ぎ捨てたレジアスは早苗にもそれを要求する。

真理の視線は先ほどの驚きから、いつの間にか妙に期待が籠ったものに代わっている。

「……………何かに感付いた訳ではありませんが、表情を作ったのはわかりました。あと妙に警戒してるのと……………うまい具合に丸め込もうとしてるの」

「充分だ」

レジアスは今度は満足そうに笑うが、デイスファルトは不思議そうに尋ねる。

「なぜ、解った?」

「そつくりだったんです」

「そつくり?」

「はい。表情の作り方が、相手を丸め込んで自分に都合よく動いて貰おうと思ってる時の弟と」

「ふっ」

真理が堪え切れずに吹き出し、デイスファルトは啞然としている。そんな中、当のレジアスは納得した様に頷いた。

「なるほど。それほど身近に同じ様な人間が居るからか」

「はあ。何だか済みません」

「表情を隠すのがなかなか上手いのもそのせいかな?」

「いえ、社会経験の賜物です」

「なるほどな。ああ、忘れるところだったな。この城に滞在中のサナエの立場だが、取り敢えずデイスファルトの婚約者と云う事にしておいた」

「は!?!」

「へ!?!」

レジアスの爆弾発言にデイスファルトと早苗の声が重なる。

「部屋も隣だ」

「なっ!?!聞いていませんよ!?!」

デイスファルトの抗議する声が聞こえる。が、レジアスはさっぱり気にしていなければ、撤回する気も無いらしい。

(あああああ!?!真理さんが言ってた強引な人のうちの一人かああ!?!)

「お前は結婚も婚約もまだしないと何か言い張ってるんだからいいだろう。突然異世界人だと触れまわってもマリの時の二の舞だ」

「あれは陛下が後先考えずに突っ走った結果でしょうが!」

「欲しい者はさっさと手に入れるのは当然だろう?」

「その結果王妃様に無用の負担を強いたではありませんか!?!」

「どの道通らねばならん事だ」

「二人ともうるさー!?!い!?!い!?!」

喧々囂々と言いあう二人に、とうとう真理が切れた。思いつきり叫ぶと一気にまくしたて始めた。

「レジアス!本人の了解も得ないで何勝手に決めてるの!?!突然右も左もわからない場所に放り出されてどれだけ心細いかわかる!?!それにデイスファルトは貴方とは違うの!取り敢えずで婚約者仕立てあげないで!大体さっきから何かおかしいわよ?レジアス、貴方何企んでるの?」

「…別に企んではないさ。マリは王妃だ。例え友人だろうが同郷の人間だろうが、隣室と云う訳にはいかないからな。彼女が現れたのはデイスファルトの私室だ。ならば事情を知るデイスファルトの隣室にしておくのが一番妥当だし、近くに見知った人間が誰もいな

いよりはマシだろう?」

「ですが…」

「だからって初対面でいきなり婚約者はないでしょう?せめて事前に相談くらいっ」

「妙齢の男女に隣室を宛がうのはそれなりの理由が必要だろう?いくらディスファルトが真面目だろうが、理由がなければ良くない噂が出回るのは必至だ」

(王様の言ってる事は尤もだ。でも、多分それだけじゃない気がする…ま、そこは私が気にするところでもないかな?)

早苗はそう自分の中で結論付け、改めてレジアスとディスファルトに向き直る。

「解りました。ディスファルトさん、ご面倒とご迷惑をおかけすることになります、どうぞよろしくお願いいたします」

そう言いながらもう一度頭を下げる。

「早苗さん…」

真理が気遣わしげに早苗を見ている。真理も、もちろんディスファルトも解っているのだろう。解った上で、早苗の気持ちを思いやってくれたのだ。これ以上二人に心配はかけられない。

「真理さん、ありがとうございます」

そう言つて早苗は微笑む。本当に嬉しかった。いきなり訳のわからない場所に放り出され、パニックを起こしそうだった。それをこの二人が救ってくれたのだ。

この世界へ来たのも、あの変態黒ずくめ・フィルのせいで、他の誰かが関与しているわけでもないだろう。

(この世界に来てから出会った人は、皆優しかった。その優しさに報いる事が出来るなら。私に出来る事があるなら、そのために必要な事なら。私は大丈夫)

この国王陛下は有能なんだろう。少し話ただけである程度どんな人物が見抜くのかもしれない。

見た目は本当に王子様だが、中身はそんなに優しくは無いのだろう。

だが、この有能であろう上司の元で、末端としてでも働けるのはい経験だろう。

「そうか。なら、部屋へ案内しよう」

「お願いします」

「ああ。ついてきてくれ」

デイスファルトはそう言い、少し笑ってくれた。

「それでは陛下、王妃様、我々は失礼致します」

「失礼します」

デイスファルトと早苗は頭を下げ部屋を出る。

「行くか」

「はい！」

二人で長い廊下を歩いていく。戸惑いも不安もたくさんあるが、先に歩きだしたデイスファルトの背中を見ていると、不思議と大丈夫な気がしてくる。

（歩き出そう、自分のために。一日も早く還るために。それにもし、本当にこの世界でやるべき事があるなら。きっと誰かの為になるだろうから。）

お開き直前の乱入者（後書き）

作者から見ると暴走夫婦です。

廊下にて（前書き）

キリのいいところで終わらせてるので、今回は短いです。

廊下にて

二人で暫く無言で歩く。王妃の間から此処まで結構距離があるので定かではないが、先ほど通った道を半分程きただろうか。あまり人とも出会わなかった。

(まあすれ違った人はちらちらと質のよろしくない視線を寄越してくれたからそれはありがたいんだけど…) (…！)
一歩前を歩くデイスファルトの背を見ると、どうしても緊張してしまふ。

(いきなり二人つきり…いや、ここに来た時もちょっとだけ二人つきりだった！大丈夫、婚約者って言ったって形だけ。そう！形だけなの！うん。落ち着け。落ち着こう、早苗！)

まだ少し混乱した頭で、何か話しかけてもいいのだろうかと思つてみると、不意にデイスファルトが足を止め振り返った。

「すまなかつたな」

「何がですか？」

突然謝罪され、何の事かわからずにいると、何となくばつの悪そうな顔で答えてくれた。

「陛下の事だ」

「ふふふつ。強引な人ですね。真理さんも苦勞してそう」

「王妃様はな。随分振り回されていらしたな」

「デイスファルトさんもね？」

きつと振り回されているのは真理だけではないだろう。そう思い、デイスファルトの顔を覗き込んでみた。

「…デイルト」

「はい？」

「少し呼びにくいんだらう？ならデイルトでいい」

「！ありがとうございます、デイルトさん？」

「さんは要らないだろう」

「じゃあ、デイルト」

「ああ」

(いつ気が付いたんだろう?)

実は早苗は長いカタカナに弱い。なのでデイスファルトの名前を呼ぶ時、間違えないように少し緊張しながら呼んでいた。

呼びにくそうにしたつもりはなかったが、この世界の人は人の機微に敏いのか、思ったよりも自分の顔や態度に出してしまったているのか…もしかするとその地位の高さのせいで人の思いを読み取るのに長けているのか。

そのうちのどれだとしても、今日初めて会って、双方の意思で無いにしても、婚約者として自分を保護してくれる事になった相手にそこまで気付かれて居たのは、やはり少し気恥ずかしい。

「愛称ですか？」

気恥ずかしさを誤魔化したくて問いかける。

「家族しか呼ばないが、婚約者ならいいんじゃないか？」

「婚約者、っていいんでしょうか？」

「俺はな。サナエこそ、良かったのか？便宜上とはいえ…」

「それは問題ありません。それはもう悲しくなるくらいに」

「そうなのか？」

緊張しているせいか、言わなくていい事まで言っている気がしないでもない。解ってはいるけれど口は止まってくれない。

「生まれてこの方恋人なんて居た事無いです」

「そうなのか？お前の世界の男は見る目が無いのか？」

「そんなことないと思いますが…」

気恥ずかしさを誤魔化す処か、とんでもなく恥ずかしくなってきた。多分顔は赤いだろう。若干涙目にもなっている気がする。

(あー！何でこんな流れになったの!?)

顔が真っ赤になっているのを自覚しながらデイスファルトを見上げる。

「っ！…すまない、行こうか」

一瞬、戸惑うような顔をし、口元を手で覆うと、ディスプレイは早苗を促し歩きだす。

余りの恥ずかしさから、彼女は彼のそんな表情の変化には気がつかなかった。

「あの、王様って、そんなにしょっちゅうドア蹴破ってるんですか？」

咄嗟に先ほどの衝撃的な光景を思い出し、話題を変えたい一心で質問を投げかける。

「…王妃様が関わると自制が利かなくなる事が多いんだ。」

「自制…」

「ああ。あれでも自制していた方だ」

（うそ！？自制してたの！？）

何しろ、早苗の人生で必要もないのに扉を蹴破って登場したのは彼だけだ。あれで自制していたとは驚きだ。

「今日は随分我慢していたからな。ああなったんだろう」

「我慢もしてたんですか！？」

（意外だ。物凄くやりたい放題に見えたけど…って！あれで自制してるだの我慢してただの言われるって…普段はどれだけ自由なのよ！?）

「俺の報告を聞いてすぐ駆け付けようとしていたからな。政務が溜まってたから押さえつけたが」

「あー、やっぱり結構警戒されてました？」

（そりゃまあ、自分の奥さんに得体の知れない人間が近付いたら心配するよなあ）

「サナエではなく黒外套の方をな」

「ああ。あの変態」

答える声が若干やさぐれた感じになるのは仕方ないだろう。

「王妃様も奴にこちらへ送られたと言っていたからな。陛下からすれば、気まぐれに元の世界へ還されでもしたらと気が気じゃないのだろう」

「まあ、やってる事は人攫いですからね」

「確かに、お前たちから見ればそうなんだろうな」

まるで自嘲するような表情をしたディスプレイルトに、何か言わなければならぬ気がして口を開く。

「…真理さんが言っていました。世界に呼ばれる人は、その世界でやるべき事があるからだって。少なくともそれが済むまでは還れないって。真理さんのやるべき事は、もう終わってるんですか？」

「どうなんだろうな。どこまでが王妃様のやるべき事なのか…俺には判断できない。だが、少なくともこの国は王妃様が必要だ。それに何より、陛下…レジアスがマリ様を必要としている」

「そうですね。うん、そうですね。真理さんも心残りはあるけど還りたいって程でもないって言っていましたし」

「なっ！？そうなのか！？」

何故か物凄く驚かれた。

（あれ？真理さん、もしかして還りたがってると思われてる？？）

廊下にて（後書き）

寧ろカタカナに弱いのは作者です。4文字以上のカタカナは8割方読み間違えます。

近衛騎士

沈黙が場を支配する。

「……………」

「……………」

無言でお互いの顔を見つめあう。それが一瞬の事なのか暫くそうして居たのかはわからないが――

「……………何やってんの？」

「っ！」

「うはあ！？」

突然真後ろから聞こえた声に飛び上がる。

（心臓！心臓に悪い！！バクバクいつてるようっ！！）

「シス」

「なにになに？逢引きい？ディスクファルトととうとう落ちたの？」

「…そう思うなら何故声をかけるんだ…」

ディスクファルトがそう言つて額に手を当てる。

「え？嘘！？マジで？」

予想外の答えだったんだろう。驚いた声が聞こえる。

「詳しくは後で話すが、彼女は俺の婚約者のサナエだ」

そう言われて、恐る恐る振り返る。

そこにはまた絵本や童話の出てきそうな金髪碧眼の見るからに騎士様がいた。

「うわ！ワフウビジン！！」

「…はい？」

（今明らかにおかしなセリフを聞いた気がするんですけど！）

「え、あーうん。君みたいな子、王妃様の故郷じゃワフウビジンって言っただって」

「言いません」

（思わず即答してしまった）

「シス。彼女はその王妃様の故郷から来たんだ」

「うっそ！？マジで！？俺の事からかってんじゃなくて！？」

(そんなキラツキラした瞳で観察しないで！)

早苗が若干引くくらいに瞳を輝かせて、まじまじと見つめてくる。

「からかってどうするんだ」

「そうだよな。デイスファルトはそんなことしないよな。て事はマジなんだな！マジなんだね！！」

デイスファルトと早苗ににじり寄って確認するが、肯定以外受け付けない勢いだ。

「ああああ〜！逢えて嬉しいよ〜！！俺はシス・ティルボステイノ！シスって呼んでね？」

物凄く期待に満ちた目で名乗られた。

「真木早苗です」

「サナエちゃんか〜。よろしくね。あ、俺第一近衛師団で主に国王の護衛やってるんだ」

そう言いながら、早苗の手を取りぶんぶんと音が鳴りそうなほど振る。

(軽い！何か色々軽いから！近衛騎士ってエリートなんでしょ！？何なのこの軽さは！そして何なのこのテンション)

頭の中では一応突っ込んでいるが、体は固まってしまっただけのままに腕を振り回されている。

「シス、その辺にしておけ」

「あ？ああ、ごめんごめん」

デイスファルトに止められてようやく我に返ったのか腕を解放される。

「あの、それで、ええと…」

何と言っていていかかわからず言いよどむ。

「改めまして。俺はシス・ティルボステイノ。第一近衛師団所属で主に国王の護衛してる。去年まではマリ…王妃様の護衛してたんだ」

「そうなんですか」

「そうなんですよー。ま、何かあったらいつでも言っつて。俺も割とこの辺うるうるしてるから」

「うるうる!？」

「いやー、結構移動が多いんだよねー。陛下と王妃様の護衛は第一近衛師団で受け持つてるんだけどね、二人ともよく動くからさ」

「そう言えば何だか行動力抜群なご夫婦でしたね」

「そうそう。結構大変なんだよね。だから傍で護衛する奴でローテーション組んで要所要所に配置したりしてるんだ」

「他の師団?の人じゃダメなんですか?」

「ダメじゃないんだけど、何かあったら結局第一師団に連絡来るからね。なら近場に居た方が早いでしょ?」

「:何だか色々あるんですね」

「そうそう。色々あるんだよ。ま、そんな訳で俺は主に陛下の傍に居るけど、この辺に居る事も割とあるんだよ」

「そうですか。ではこれからよろしくお願いします」

「うん、よろしくね」

(シスさん。シス:苗字は覚えられない。諦めた)

そう挨拶して少しばかり失礼なことを考えながら頭を下げた早苗を、シスは優しげな眼差しで見っていた。

「そう言えばこの後陛下の所か?」

それまで口を挟まずに二人のやり取りを眺めていたデイスファルトがシスに向かって問いかけた。

「ん?ああ。まーたやったんだろ?休憩返上だ」

「悪いな。止められなかった」

「気にするな。あいつを止められる奴はそういないからな」

「まあな。ところで...」

デイスファルトはそこで言葉を止めて早苗に視線を移す。

(んあ?)

「ワフウビジンとは何の事だ？」

(それかー!!)

「おう、サナエみたいな子の事だろ？」

「違います」

「えー！だって前にマリが言ってたぜ？確か：黒目黒髪で髪の毛は艶があつて、ついでに長いとなおよし。それで色白で：あ、たれ目よりちょっとだけ上がり気味で、そう、言い表すなら凜とした美人！んで背は高すぎないのがイイ！とか何とか」

「いえ、それは多分真理さんの独断と偏見と好みが入り混じった物だと思えます。ついでに私はそんないいもんじゃありません」

「いや、当てはまってると思うぞ？」

さらりとデイスファルトにまで言われ、顔が熱くなっていく。

(なんなの！？もう!!)

「：和風美人つて多分着物や浴衣：私の居た国の民族衣装ですけど、それが似合う綺麗な人の事だと思えます。それに、基本的に日本人は黒目黒髪です。最近じゃ染めてる人も多いですけど…」

「染めてるつて：髪をか？」

「はい」

「へへ、でもサナエは染めてないんだ？」

「はい。必要性を感じなかったのだから」

「そうだな。これだけ綺麗な髪だ。染めない方がいい」

そう言つてデイスファルトは早苗の髪に触れる。

(うわあああ!?)

顔が熱いどころではない。恐らく真っ赤になつてゐるだろう。

「へへ？」

「なんだ？」

「いや、別に？そう言えばさつきも見つめ合つちやつてたよね」
早苗を挟んで会話しているが、デイスファルトは早苗の髪に触れたままで目の前のシスはニヤニヤと嫌な笑顔を浮かべてゐる。

「ああ。驚いていてな」

「驚いて…見つめあってたの？」

「まあそうだな。王妃様はサナエに元の世界に心残りはあるが還りたいほどじゃないと言ったそうだ」

「…そう、か」

この時、明らかにシスの表情が変わった。

「つと悪い、そろそろ行かないと文句言われる」

「ああ。そうか」

「またな、お二人さん」

そう言っつてシスは王妃の間の方へ歩いて行っつた。

「あの、やっぱり意外な事だったんですか？真理さんが還りたい訳じゃないのって…」

デイスファルトは何故か未だに早苗の髪を触っているの、振り向けずそのままの体勢で聞く。

「そうだな。何しろ一年程前に王太子殿下を連れて還ろうとなさつたからな」

「…ええ!？」

驚いて振り返りデイスファルトを見上げると、彼は何とも言えない苦い表情をしていた。

近衛騎士（後書き）

ほっといたらずっと見つめ会ってそうだったので、シスに声をかけてもらいました。なかなか先へ進まない…

サブタイトルと内容の不一致は出来ればスルーして下さい。

専属侍女と質問大会（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

専属侍女と質問大会

- 今から一年程前、陛下に側室をと言う動きが起こった。それが引き金になったのだらう、王妃様は元の世界に還ろうとした。王太子殿下を連れて。だが実際の所、還ろうとした本当の理由も、この世界に留まる事にした理由も知っているのは王妃様御本人と陛下だけだらう -

あの後、またしばらく見つめ合っていたが、流石にいつまでもそのまま廊下で立ち止まって居るわけにもいかず、お互い考える事があつたのだらう。早苗の部屋の前まで無言で歩いた。

そして部屋の前でディスプレイはそう言つと、真実を知りたいのであれば真理に聞くように言い、何か困つたり解らない事があれば隣の部屋に居るからと言い置いて自室へと戻つて行つた。

自室へ入っていくディスプレイを見送りながら、早苗は何故真理が還ろうとしたのかを考える。

もちろん自分の世界に還りたい気持ちは何処かにあるのだらう。

(でも…真理さんは…)

真理は言っていたのだ。自分の欲しいものはこの世界にあると。

「ま、ここで私が考えても答えなんて出ないか。今度聞いてみよ」
そう呟いて自分に用意された部屋へ入る。

そこには侍女服を着た女性がいた。

「…えーと…」

一瞬どうしていいかわからずに居ると、彼女は優雅に一礼をして笑顔を見せてくれた。

「はじめまして、サナエ様でいらっしゃいますね？わたくしサナエ様の専属侍女を仰せつかりました、ルツティア・メイファと申します。これからどうぞよろしくお願いいたします」

そう自己紹介をし、ルツティアはまた綺麗な礼をした。

「専属侍女…？ああ！」

(そう言えば真理さんが付けるって言ってた！)

色々あったせいか、侍女を付けると言われていた事をすっかり忘れてしまっていた。

この世界の事を、全く解っていない自分にとってこれから随分頼る事になるだろう相手だ。

「こちらこそよろしくお願ひします。真木早苗と申します。お聞きの仕事と思いますが、別の世界から来ました。なのでこの国どころか、この世界の常識も何もわからないのでご迷惑をおかけすると思いますが、どうぞよろしくお願ひします」

早苗もそう言いながら頭を下げる。

「まあ！サナエ様！サナエ様は宰相閣下の婚約者とお聞きしております。そんな方がわたくしに頭をお下げにならないで下さい！」

ルツティアは慌てたようにそう言ったが、早苗としてはそうもいかない。

「いいえ、婚約は形だけです。あと私、人にお世話される経験もないので出来れば普通のルツティアさんとして接してもらえれば嬉しいです。あ、もちろんお仕事に支障が出ない範囲でいいので」

「…そうですか。ではサナエ様、お互いの事を知るために質問致しませんか？」

「質問ですか？」

「はい。その中でお互いの妥協点とでも申しましょうか、そこを見つけましょう！」

「そっか、ルツティアさんにとって私の専属侍女はお仕事だもんね。でも私はそれだと少し難しいから…」

「はい！実はわたくし、サナエ様の侍女に指名されてから伺ってみたい事がたくさんあったんです！」

早苗が可能な範囲で普段通りに接してほしいと言ったからだろうか、最初の完璧な侍女ぶりとは違う年相応の笑顔を浮かべながら答えて

くれた。

(たぶん、この子とは友達みたいな関係になれる。そんな気がする)
「じゃあ、まず名前！えーと、ルツティアさんは私の事『様』付けで呼ぶのは絶対？」

「そうですね。そこは流石に変えるわけには…あ、わたくしの事はルツティとお呼び下さい！」

「うん。じゃあルツティね。じゃあ次は年ね。私は今年で25歳なんだけ」

「えええ！？」

思いつきり叫ばれた。そんなに驚く事なんだろうか…

「見えません！全く見えませんから！！わたくしより1つ2つ上くらいだと思ってました…」

「ルツティいくつ？」

「18です」

「…ぴちぴち」

「はい？」

「ごめんなんでもない！」

(しかしまあ18歳の娘に1つか2つ上に見られてたとはねえ…ま、日本人は若く見られるのは何処でも一緒って事かな)

「ですが…サナエ様の国の方はお若く見えるんですね！王妃様もとてもお若く見えますし！」

「あー、うん。私の世界でも、私の国の人は若く見えるみたいだね。でも真理さんは国とか関係ない気もするかなー？確かお祖母さんがイギリス…別の国の人だって言ってたから」

「そうなんですか？でもお二人ともお若く見えますわ！」

「ありがとう。ルツティって侍女になってどのくらい？」

「わたくしは14の時に行儀見習いとして王宮に上がりましたので、4年ほどになりますわ」

「この国ではそんなに若いうちから働くの？」

そう聞くとルツティは少し考えるように言った。

「若い、のでしょうか？わたくしの家は下級貴族ですが、大体の下級貴族の娘は14、5歳で王宮に上がって、結婚するまで侍女として過ごす事が多いですね。上級貴族のお嬢様ともなればお屋敷で過ごすのですけれど、こちらはその分ご結婚が早いそうですよ？」

「…ちなみに結婚適齢期は？」

「女性は身分によつて違うんですよ。この国の成人が18歳なので、上級貴族は成人してすぐに結婚される方が多いです。わたくしたち下級貴族は20歳過ぎくらいですかね…街の方々も20頃と聞いておりますが」

「早っ！私この国だと嫁き遅れだねー」

「そんなことは…！」

笑いながら言うと、ルツティアは相当焦って否定してくれた。

（ルツティって…小動物みたいで可愛いな…あわあわってこういう動きの事なんだろうなー）

必死な様子が可愛らしく、早苗は暫く見ていたかったが、それもかわいそうなので大丈夫だと言っておく事にする。

「大丈夫。私の国、あ、日本って言うんだけどね、そここの国が全然違うのは解ってるから」

「そ、そうですね。それにもし誰かが何か言ってきたら、宰相閣下の御意志なのでって言うっておけば大丈夫ですよ！」

「え？それで収まるもんなの？」

「はい。お相手のお仕事の都合で結婚が遅れる事もある事ですので、そうなんだ。そう言えばルツティは決まった人は居るの？」

「はい。婚約者が一人」

「そうなんだ。どんな人？」

「知りません」

「え！？」

さくつと即答されてしまつて少し驚く。

「父が決めた相手なのでお会いした事は無いんですよ」

「そうなんだ…」

「はい。よくあることですよ。あ、サナ工様のお国の事をお聞きしてもよろしいですか？」

「いいよ」

(そっか、身分制度があるんだもんね。結婚も家同士か)

そんな事を思いながら、ルツティアの質問に答える。彼女の質問は多岐にわたった。早苗の事を理解してくれようとしているのだろう。生活、結婚、社会、直接早苗の生活や価値観に影響の大きそうなものを特に多く質問してくれた。

年頃の娘だけあって、恋愛や結婚の話題には食い付きが良かったように思う。

早苗とルツティアの質問大会は、ディスファルトが夕食の誘いに来るまで続けられた。

宰相と王妃・1 (前書き)

今回はデイスファルト視点です。

宰相と王妃・1

光と共に現れた彼女は、驚くほど鮮やかに心の深い部分に滑り込んできた。

その日のその時間、デイスファルトが自分の私室に居たのは本当にたまたまで、とても珍しい事だった。

突然強い光が部屋に満ち、その光の発生源と思われる場所に黒髪の女性が蹲っていた。

普通に考えてこんな現れ方をする人間は居ない。ならば普通でないのだろう。たった一つ、心当たりが無いわけではないが。

話してみると彼女はサナエと名乗り、やはり此処とは違う世界、所謂異世界から来たようだった。ただ、余りにも非常識な状況の割に随分落ち着いているように見えた事が少し心配だったが。

サナエもデイスファルトが彼女の言い分をあっさり信じた事を随分戸惑っていた様だったが。

（まあ、普通はそうそう信じられる内容ではないからな）

以前のデイスファルトなら相手の言葉だけでは信じなかつただろう。そう、前例さえなければ。

近いうちにサナエを会わせられるようにしておかなければならない。そんな話をしている時だった。けたたましい音と共に扉が開けられ件の人物が駆け込んできた。

恐らく廊下を全力疾走してきたのだろう。その姿にサナエは完全に固まってしまっていた。

（あれ程廊下を走るなど言ったのに…）

丁度いいのでマリ・王妃様にサナエを紹介する。そうするとマリは凄い勢いでサナエに詰め寄っていった。

どうやら昼寝中、夢に黒外套が現れたらしく飛び起きて此処まで走ってきたらしい。

その上サナエはマリと同郷の人間らしく、それを聞いた時のマリの瞳はこの上なく輝いていた。

その後、サナエはマリに引き取られ、ディスファルトは国王であるレジアスに報告に行く事になったのだが、報告すれば仕事を放り出してマリの所へ行きかねないので、正直気が重い。

（仕方ないか：せめて今日の分の政務を終わらせてもらわないとな。）

そんな事を考えながら王の執務室へ向かう。

国王は決して愚王ではない。寧ろルフア国始まって以来の賢王として国内外にその名を轟かせている。

その国王が唯一全てを投げ出しかねない相手 - それが王妃であるマリなのだ。

マリはある日突然現れた。それも当時王太子だったレジアスの寝室に。

マリもサナエと同じ様に何も無い空間を通ってこの世界へ来たらしい。その時、黒外套に会ったと言っており、その直後神殿へ異世界より使者を送ったと信託が下った。

マリはそのまま神殿が後見につき、神子として扱われた。

そのお陰でマリは何の罪にも問われなかったのだが、レジアスに目を付けられた。

（俺はそういつた事には疎い方だとは思うが：あれは多分一目惚れだったな）

マリの見た目はそれこそ童話に出てくる妖精の様なと表現される事が多いが、性格は見た目に反してなかなか一筋縄ではいかない。

レジアスも素直に想いを告げれば良かったものを、いつもの笑顔で周りを説き伏せ丸め込み、外堀を埋めてマリを半ば騙すような形で

婚約者に仕立て上げた。

しかもそれをマリが来て一月程でやってのけたのだから、有能ではあるが始末に負えない。

（その後のマリのこの国への貢献を考えれば、俺たちにとっては有り難い事だったが、マリからすればいい迷惑だっただろうな）

ルフアは歴史ある大国だ。それが、先々代の王の頃から徐々に崩れ始めていた。

不正・横領・癒着：悪政が王宮を蝕み、地方は領主の重税に苦しめられていったそうだ。

先々王が亡くなり、先王は何とか国を建て直そうと奔走したが、国が崩壊しないように押しとどめるのでで精一杯だった。

レジアスも王太子として、国の為に生きていた。何にも執着せず、ただこの国を良くする為に。

そのレジアスが突然現れたマリに驚くほどの執着を見せた。

例えば神殿の後見が付いた神子と言えど、普通は反対されるが、マリはとても頭の回転が速かった。元の世界では学生だったと言っていたが、相当高度な勉強をしていたのだらう、この国の問題点・改善点を次々と上げていった。

もちろんそれまでも変えようとしてきた所も多くあったのが、マリは明確な改善案、きちんと筋が通った理論。反対派の貴族達もすぐに反論できない物を用意してきた。

そして何よりマリの神子としての立場がたくさんのお事を後押しした。そして改革が始まった矢先、即位から碌に休むこともせず働き続けた先王が改革をレジアスとマリに託して崩御された。

それからのレジアスの動きは周囲が戸惑うほど早かった。それまで溜まっていた膿を掻き出すように改革を推し進めた。マリと共に。

当初は混乱もあったが、それもこちらが想定している範囲内で済んだ。

（今では一部を除いて随分とまともに機能するようになったからな）

そして色々な事が少しずつ落ち着いてきた矢先、マリの帰還騒動が起きた。

その頃ある貴族の娘を側室として迎え入れる動きがあった。レジアスにその気は全くなかったのだが、マリに何事か吹き込んだ者が居た。

（実際何を言われたのかマリは言わないが、どうせ碌でもない事なんだろうがな）

ルフアでは一応側室は認められている。何代か前の王が非常識な規模の後宮を作り、後継者争いで多くの血が流されて以来、少数に限られているが。

貴族たちの権力のバランス、近隣国との友好関係を考えて婚姻が最も適切と判断された場合などは側室を迎える。

マリももちろんその事を知っていたし、価値観の違いはあると言えどルフアの王妃として生きていく事を決め、子を成したのだ。

（俺は詳しくは聞かなかったが…それまでのマリとどうしても何かが違う気がしたな…）

その時まで誰も、マリが元の世界に還る事が出来る事を知らなかった。そしてなにより還ろうとするなんて思わなかったのだ。たった一人を除いて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2115y/>

王宮公認会計士

2011年12月29日16時48分発行